

ローマ字表記の問題点とこれから

街の地名表記や駅名表記などでローマ字を目にすることが多くなっている。例えば、私たちが良く目にするJRや東京メトロの駅名ローマ字表記を見ると「新浦安」は Shin-Urayasu だが、「二俣新町」は Futamata-Shimmachi であり、撥音を m と n で書き分けている。「八丁堀駅」は Hatchōbori で、促音を t で表している。また、長音を表記するのに人名表記で、「やましたようこ」の場合 Yamashita Yohko と、伸びる母音のあとに h をそえるものも出てきている。こうした表記は、学校教育で習ったものと少し違う。私たちが目にするローマ字にさまざまな表記があるのは、なぜなのだろうか。長音の表記を中心に考えてみる。

日本で使われているローマ字表記は「ヘボン式」と「訓令式」。それに、「改正ヘボン式（標準式）」「日本式」である。小学校で教えているのは「訓令式」と「ヘボン式」で、JR など鉄道の駅名ローマ字表記は「改正ヘボン式」である。それぞれ表記が違い、長音は、伸ばす母音の上に「^」（山型）をつけたり（訓令式）、「ー」（横棒）をつけたり（ヘボン式）して表される。最近では、何もつけないものや h をそえるもの、母音を重ねるものなどさまざまな長音表記が見られる。この表記が決められた当時は、パソコンが

ない時代であり問題にはならなかったが、パソコンやワープロが普及しはじめて、山型や横棒を入力できないことが問題になってきた。ローマ字の長音をパソコンで打ち込むのに入力者それぞれの考えで表記したため、さまざまなものが出てきてしまった。また、この記号はあくまでも日本の決まりで、多くの外国人には読めない記号である。外国人が読めるように、記号以外の表記を考えざるを得なかったのだろう。長音以外でも外国人が日本語をその音に近く発音するにはどう表記すれば良いかを考え、さまざまな表記の工夫がされてきた。これがいくつかの表記を生む理由になっているのだろう。

これらのローマ字表記を統一しようという動きは今のところない。どの表記にも合理性があり、優劣がつけがたいということのようだ。今後、表記の種類が増えることも考えられる。日本には、英語以外の言語を使う外国人も多くなっている。現在のローマ字は英語の発音を基礎に考えられており、これでは読みにくいという人が多いだろう。こうした人たちにも読みやすいローマ字の表記を考えられるようになり、新しい表記が出てくることもあるのではないかと。山下 洋子(やました ようこ)